印度學佛教學研究第37巻第1號 昭和63年12月

シャンカラの聴聞・思惟・瞑想

村 上 幸 三

聴聞 (śravaṇa), 思惟 (manana), 瞑想 (nididhyāsana) は *Bṛhadāraṇyakopaniṣad* (=*BU*) Ⅱ. 4. 5 及び Ⅳ. 5. 6 の末尾の一節に由来し，ヴェーダーンタ派の解脱のための3つの実習段階と言われている[1]。Śaṅkara (=Ś) の *Brahmasūtra-bhāṣya* (=*BSBh*) の中でも，聴聞等がブラフマンを認識するために為されるとされており[2]，それらは無視されていない。三つの内，聴聞はウパニシャッドの文(vedāntavākya=vv) の意味を知ることを，思惟は，vv と矛盾しない，vv の理解を深めるための理論的考察 (tarka, yukti, anumāna) を指す[3]。こうした，理論的考察をもともなう vv の研究がアートマンの認識を得るために為されるというのが，*BSBh* の中で強調されることの一つである[4]。だが，だとしたら，聴聞と思惟だけでアートマンの認識過程の説明がつきそうである。実際，*BSBh* が残りの瞑想をはっきり説明することはない。そこで本論では，*BSBh* の範囲で，瞑想の役割をどう考えるべきか，vv の研究とそれがどう関わるかを考察する。

nididhyāsana ということばは dhyāna と同義とされる[5]。dhyāna は *BSBh* によると等しい観念の流れを作ること (samānapratyayapravāhakaraṇa)であり，manas における行為である[7]。人間にもとづく (puruṣatantra) 点で，認識手段から生じて実在にもとづく (vastutantra)，アートマンの知をも含む知識とは区別される[8]。だとすると，アートマンの認識過程における瞑想も，個人の意志に従ってある観念について「等しい観念の流れ」を作ることであるといちおう考えられる。

Ś は前述のアートマンの認識のみによって無明が停止されると主張する。その解脱をもたらす知は，ブラフマンとアートマンが同一のものであることを示す "tat tvam asi" (汝はそれである) という文の意味の知でもある[9]。その文意の知を反復することは無用である。Maṇḍanamiśra の様に，vv から得られる知識を反復して，無知の saṃskāra を退け，ブラフマンの完全な直観に至ると考えることはないからである[10]。つまり Ś にとって，聴聞・思惟によって得られる "tat tvam asi" の文意を「等しい観念の流れ」の「観念」にするということはできない。なお，ブラフマンの念想なるものが，アートマンの認識と直接の関係を持たないということは言うまでもない。このように，nididhyāsana は vv に由来する

ことばではあっても，Ś にとって処理しづらいことばであったと推測される。

そのやっかいなことばを目立たぬ形でアートマンの認識過程に取り入れていると考えられるのが，*BSBh* Ⅳ. 1. 2 中の，最高ブラフマンの認識のための手段の反復・繰返し（abhyāsa, āvṛtti）をあつかう部分[11]である。

その反復は次の(ア)—(ウ)の様に表現される。

(ア)一度聴いてはっきり理解できなかった文の意味が繰り返され，それを通じて正しい文意が理解される（(ア)は一般的にいうとこうなるが，ここで具体的に問題にされる文は "tat tvam asi"）[12]。

(イ)"tat tvam asi" の文意を知る前提として，tat, tvam の2つの単語のそれぞれの意味を識別するために，教典（śāstra）と理論（yukti）が反復される。[13]

(イ)′（これは(イ)で言う理論の反復の内に入ると考えられるので(イ)′とする。）tvam の意味を識別するために，身体・器官・manas・buddhi・対象・感受（vedanā）等からなる多数性を，非アートマンとして一つ一つ退けていく[14]。

(ウ)人を "tat tvam asi" という文の意味に集中させる（sthirīkāra）。これは理解力の弱い者（mandamati）に必要とされる[15]。

以上の4通りに表現される反復は，vv についての "tat tvam asi" という文の意味を知るための，反復をともなう研究，vv からアートマンの認識を得るための努力である。知が vv という認識手段から生じることと抵触せず，人間にもとづく行為でありながら知の発生に役立つ。しかも，即座には生じないアートマンの認識を得ようとしている状態という，現実に当然予想される事態を説明している。

その反復が瞑想の暗黙の内の置き換えであると考えられる。その理由は(i)その部分が聴聞以下の図式を意識して書かれている。その典拠である *BU* の一節の引用があるうえに，瞑想以前の段階，聴聞・思惟に関係する śāstra（教典聖典）・yukti（理論）という語句が頻出することからそれがわかる。(ii) *BSBh* Ⅳ. 1. 1で，śravaṇa・manana・nididhyāsana の三語を取り上げた上で，nididhyāsana という語が dhyāna と同義であり，それ自体で反復をともなう行為を指すと強調している[16]。瞑想が反復をともなう行為であるという考えはⅣ. 1. 2 にも反映されていると考えられる。

(ア)—(ウ)の反復は，この様に瞑想の置き換えとみられるが，瞑想であるとは明示されていない。この事情は2通りに推測される。(i)アートマンの認識過程の反復学習は比喩的に瞑想とされる。「反復」という nididhyāsana との共通点がそれを

可能にする。(ii)アートマンの認識過程での反復学習という意義を，ここで積極的に瞑想に与えている。未だ不明確な“tat tvam asi”の文意に限って「反復」の対象，「等しい観念の流れ」の「観念」となる。その実，教典と理論が「反復」されるのだから，明らかに **vv** の研究の続行である。もっとも，この様な瞑想は，当時の瞑想に関する一般的理解とおそらくずれていて，しかも聴聞・思惟との境が不明確なため，瞑想であると暗示されるにとどまったと考えられる。

そこで次の様に結論される。伝統説としての「瞑想」はŚの知識観，ブラフマン観に照らして不都合なことばだった。しかし，**vv** の意味を介してアートマンの認識を構成する行為，あるいは“tat tvam asi”の文意がわからない状態という新しい意義を与えた。もしくは比喩的にそれにすりかえた。結局，**vv** の研究に埋めこまれた形でのみ，瞑想が受容されたとみなされる。聴聞・思惟に比べて独自の意義に乏しいと言える。

---

1) 日野紹運「Sureśvaraに於ける nididhyāsanaについて」『印仏研』29-2, 1981；波多江博子「Śaṅkara の行為観について」『西日本宗教学雑誌』8, 1986；島岩「不二一元論学派における解脱への道」『宗教研究』269, 1986 参照。
2) *BSBh* (*Parimala Sanskrit Series* No. 1) I. 1.4 p. 153^{1-4}.
3) *Ibid.*, I. 1.2 p. 89^{1-5}; II. 1.4 p. 441^{2-4}; II. 1.6 pp. 444^{12}–445^{2}; IV. 1.2 pp. 931–936.
4) *Ibid.*, I. 1.1 p. 83, その他に(3)の参照箇所を見よ。
5) *Ibid.*, IV. 1.1 p. 929.
6) *Ibid.*, IV. 1.8.
7), 8) *Ibid.*, I. 1.2 p. 91; I. 1.4 pp. 128–129.
9) *Ibid.*, IV. 1.2 pp. 932–936.
10) *Brahmasiddhi*, Madras 1937, pp. 35^{1}–36^{3}; p. 74^{11-14}. A. W. Thrasher, Maṇḍana's Theory of Vikalpa. *WZKS*. XXII. 1978. p. 153ff.
11) *BSBh*, IV. 1.2 pp. 930^{6}–936^{13}. この部分について T. Vetter, *Studien zur Lehre und Entwicklung Śaṅkaras*. Wien 1979, pp. 118–125 が詳しい。
12) *BSBh*, IV. 1.2 pp. 933^{4}–934^{1}.
13) *Ibid.*, pp. 934^{1}–935^{7}.
14) *Ibid.*, p. 935^{7-9}. これは，外界のアートマンへの付託の否定という点では，『ウパデーシャ・サーハスリー』散文篇第三章の内容に類似する。前田専学『ヴェーダーンタの哲学』京都1980, pp. 87–88 参照。
15) *BSBh*, IV. 1.2 p. 936^{11-13}.
16) 注5)参照。

<キーワード> nididhyāsana, tat tvam asi, śāstra, yukti, *Brahmasūtra* IV. 1. 2.

（東北大学大学院）